杉山先生そして川崎の街

川崎幸病院　関川 浩司

2006年10月だったか、川崎市内の外科系研究会でのこと、人懐こそうなそして笑顔を絶やさない一人の男性が近づいてきた。そして「久しぶりです。杉山です。」と名乗っていただいた。久しぶり（？）のことゆえ、小生は自らの脳裏に「誰だ？」と問いかけたものの、その方と小生の存じ上げている岐阜の杉山先生とがしばらくの間一致せず、脇の下に冷や汗をかきながら対応したのである。「このたび帝京大学溝口外科にきた杉山です。前任は岐阜大学でした」「ああそうか、やはり小生が存じ上げている岐阜大学の杉山助教授か……。以前に広島で峠先生が会長だった癌治療学会の折、豪華客船に乗り教授たちの接待にともに助教授の身で一緒に駆けずり回ったあの方か」と合点がいき、一方では「岐阜にいた方がなぜこの川崎に？」との思いを持ったのである。半年前に福島医大からここ川崎の地にご縁があり赴任し、周囲の方々に毎回のように「なぜ川崎に？」と問われていた自分をさておきながら、杉山先生に「なぜ？　どうして？」と矢継ぎ早に質問をしていた。

それからというもの、研究会の多い神奈川県や川崎医師会などの集まりで毎週のように、いや毎日のようにお会いする機会を得、先生の医療と教育に対する熱い思い、たったお一人で学会発表に参加する情熱、そして常に微笑みとダジャレを絶やさないそのお人柄にいつの間にか惹かれていったのである。そして、福島からここ川崎の新天地に来て右も左もわからなかった私が大いなる味方を得たと思い、東京、横浜にも負けない川崎オリジナルを発信したいとの思いを実現するための良き仲間と勝手に位置づけし、お付き合いをお願いしたのである。

あのころ川崎市や横浜で行われる神奈川県レベルの会合には毎回のように出席し、そして何らかの発表をしようとお互い意識しながら行動し、少ない医局員を鼓舞しながら活動を開始。ちょうどそのころ、日本医大武蔵小杉病院消化器病センターの教授が上部消化管を主になされていた徳永先生から下部消化管を専門としていた鈴木英之先生に交代となったのであるが、それを契機に同世代である杉山先生、鈴木先生そして小生の川崎の３銃士（？）が丁々発止の活動をここ川崎の地にて繰り広げることとなったのである。まず手始めに行ったのが、３名がともに専門とする大腸がん関連の川崎地区での各種研究会の立ち上げ。当時川崎地区では周辺病院の横の連携もあまりなく、川崎地区の外科医たちの多くは横浜で開催される研究会や東京で開催される研究会に出席することが多かった。トップだけではなく中堅スタッフ、さらには研修医たちが一堂に会することができる会の川崎での設立を目指し立ち上げたのであるが、研究会を通じた勉強もさることながら、その後の懇親会を終えた後も引き続き自主的な飲み会を開催。本音トークの医局の話題、手術、そして臨床研究などについて夜も更けるまで飲むことたびたびであった（写真①）。またいつのころからか全国で行われる学会でも連絡をとりあいながら飲み会を催したりしたこともあった。

あの当時、川崎における市民公開講座開催の提案が某薬剤メーカーと某新聞社からなされ、当時日本医大武蔵小杉病院の教授であった徳永先生を中心に『大腸がんを治す』をテーマに川崎市民健康セミナーを杉山先生、鈴木先生、小生に加え、関東労災の石丸先生、聖マリアンナ東横病院の宮島先生、そして市立川崎総合病院の壁島先生を加えた面々で行ったのもいい思い出である。たぐいまれな名司会でお呼びした著名人たちとの絶妙なトークをされた徳永教授を中心に会は開催されたが、そのころには川崎地区の主だった病院のトップの顔も見えるようになり、ますます一体感が肌で感じられるようになって

写真①　川崎での研究会にて

写真②　KRSS 集合写真

いたのである。

そのようなころ、小生が二宮にあるテルモのメディカルプラネットに見学に行く機会があり、その研修施設の利用についてテルモのスタッフから意見を求められたとき、あのすばらしい環境に立地したすばらしい設備、そしてラボ、さらには熱い思いを持ったM女史をはじめとした動物舎のスタッフの方々と出会うことにより、それまでひそかに温めていた「外科医を目指す若手研修医たちに外科スキルを体験させることによって外科を親しみ、そして外科医獲得に一翼を担う研修会の開催」「指導者あるいは中堅が一堂に会し若手教育という一つの目的に集うことを通じ顔の見える地域連携の構築」を目指し『川崎レジデントスキルアップセミナー（KRSS）』の構想を具体化したのである。

この企画に関し最初に相談したのもそのころにはすでに気心が知れていた杉山先生、鈴木先生であったのは言うまでもない。彼らにお会いするたびにこの思いをお伝えし、快く賛同していただき、2010年ついに実現を迎えたのである。2010年６月に第１回を開催。参加施設３施設（帝京大学溝口病院、日本医大武蔵小杉病院、川崎幸病院）研修医17名（初期研修医13名、後期研修医４名）指導医17名の34名で開催したが（写真②）、その評判は研修医、指導医からもすこぶる良く、再度の開催を求められた。またこのセミナーでは交流も目的の一つとしていたため、飲み会も開催。半日とはいえ、二宮の自然に囲まれた環境の中、大いに盛り上がったのは言うまでもない（写真③）。また帰りの東海道線ではグリーン車を占拠し、そこを飲み屋と化し大いに飲み、あまりの騒がしさに車掌から注意されることたびたび。それにもめげずに大いに語らい、大いに飲んだのも懐かしい思い出である。この開催顛末に関しては杉山先生が日本外科系連合でご発表され、また小生が日本外科学会雑誌113（２）257－262、2012で誌上発表している。

この素敵な仲間たちとともに川崎で思う存分の活動を多方面にわたり行っていたが、杉山先生の岐阜へのご異動に伴い、川崎での一時代が終わった感も否めず、いまでは市民健康セミナーもなくなりまた昨年まで開催されていたKRSSもその役目をひとまず終了という形になった。

川崎という街は東京と横浜に挟まれた不思議な街である。都会であって都会ではなく、この街を構成している人々の多くは地方から来た人々である。杉山先生や小生もご多分に漏れず。だがそれだからこそ温かみのある街でもある。またなんでも受け入れてくれる街である。そんな街で杉山先生と出会い面白おかしい数年を過ごせたこと、そしていい形での顔の見える地域連携をなし得たこと。

素晴らしき仲間たちにあらためて感謝。楽しい日々であった。

最後に　杉山先生こと　第23回日本癌病態治療研究会　当番世話人　杉山保幸先生

本当にご苦労さまでした。

写真③　KRSS 懇親会

文献：

1）多施設共同研修医スキルアップセミナーについて－外科医不足解消および地域連携のための方策として－
関川浩司、鈴木英之、杉山保幸
日本外科学会雑誌113（2）：257－262、2012